

「白砂青松再生の会」お便り No. 28

佐渡のマツ

昨年から名古屋に本社のある、セイエイ・エル・サンテ・ホールディングスという医療介護機器の販売会社から、社員教育のために共生について話すように頼まれて、時々出かけている。実はこの会社の会長、中澤肇さんが大のキノコ好きで、私の著書を読んでくださっていたからである。このところ白砂青松再生の会もお手伝いいただくことになり、おかげさまで心置きなく計画を進めることができるようになった。

その一環として8月上旬に新宿支社で話したついでに、佐渡へ出かけることにした。若いころから全国をあるいてきたが、佐渡は初めてである。猛暑の中を高速艇に乗って一時間、海を渡り両津港につくと、佐渡で活動している「森の会」の牧れい花さんと宮下正次さん、福嶋徹夫さんの三人が待っておられた。さっそく、両津にある樹齢300年の「村雨の松」を見に行く。「村雨の松を保存する会」の会長、86歳の中川吉右衛門さんや植物に詳しい中川清太郎さんが熱心に説明してくださるのを聞きながら、見事な老木を見る。

ここは代官所の跡で、今は海上保安庁の建物が建っている。ところが、車の出入りが多かったので、マツが弱り、市民からの要求で支柱を建てたり、炭を埋めたり、柵をしたりと、いろんな策が講じることになったという。最近樹勢が回復したということだが、周囲を掘り返して適当に根を切ったのがよかったのかもしれない。葉の色つやもよく意外に元気で、土を掘ると菌根が見つかった。数年前の三瓶山の「定め松」に比べれば、よほど元気である。

石見銀山と佐渡金山、「定め松」と「村雨の松」、代官はどちらも大久保長安。よく調べれば、判じ物のような話ができあがりそうなので、双方で交流してはという話になった。その後9月の末に「定め松」の診断に島根県大田市を訪れた時、この話を市や地元の人に伝えた。マツが取り持つ縁で交流が広がることを願っている。ちなみに、生き残った450年生の「定め松」は誰が見ても元気になり、楨野さんによると埋めた炭の中に菌根ができて、根元からは2年続けてキハツタケが出たそうである。

そのあと、長石海岸の松を見に行く。途中有名なホテルのマツ林がきれいに残っていたが、やはり落ち葉かきや草刈りがされていて下には稚樹も育っている。

海岸沿いの砂丘には十数年前まで立派なクロマツ林が残っていたそうだが、御多分に漏れず、かなり枯れて傷んでいる。大きなクロマツが内陸側から枯れて広葉樹が茂り、落ち葉が厚く溜まっていた。このままでは枯れてしまうので、何とか大掃除をするように頼んだが、トキの営巣地が近くにあつて、問題も多いようである。地元の方々は熱心で、何とか取り組みたいとのことだった。ひどく暑い日だったので、いただいた冷えた麦茶のおいしかったこと。

佐渡のマツはほかのところと違って、樹皮の亀裂が小さく、全体に白っぽい肌をしている。樹皮が白いクロマツは福井県的美浜原発の入り口にもあつて、白竜松と名付けられている。また、若狭街道沿いにも植えられていたのか、数十年前にはまだ並木が残ってい

た。船便があったので佐渡から持ってきたのか、佐渡へ行ったのか、詳しいことはわからない。どうやら佐渡のクロマツはすべて、同じ系統のように思える。やはり抵抗性マツだからと言って、遠隔地のものを安易に植えるのは考えものである。

夜は牧さんたちのお世話で、地元の皆さんに夜遅くまでマツ林再生やナラ枯れの話聞いていただいた。宮下さんや牧さんの行きつけの静かな民宿、桃華園に泊まったが、夜中になっても温度が下がらず、熱いお風呂で大汗をかいた。佐渡の人はいい人ばかりのようだが、残念なことに木はかなり傷んでいる。

ナラ枯れと炭まき

翌朝早く起きて、「森の会」が炭を撒いたというコナラの多い「ゆずろ公園」へ行った。クリ、サクラ、ヌルデなど、広葉樹の葉がしおれたように下を向いて巻き込み、朝 8 時過ぎだというのに元気がない。周辺には枯れたコナラが見えるが、なぜか、炭を撒いた一面では生き残っている。中に入ってみると、凹凸のある地形で、炭を均一にまくのが難しそうだった。宮下さんや牧さんのグループ、「森の会」のメンバーが 3 年前に幹の周りに木炭を撒き、昨年竹炭を撒いたという。撒いた量が少なく、落ち葉をはいで探す程度だったが、炭のかけらがあるところにはコナラやそのほかの樹木の根が増えて、確かに菌根が認められた。

地元の福原さんや中川さんにも加わってもらい、5 か所掘って調べたが、4 か所に菌根があったので、間違いなく炭の効果があつたと思われる。虫の穿孔からは樹液が出て、新しい穿孔はほとんどない。わずかな量でも効果が表れ、樹勢が回復するようである。実は以前に宮下さんから聞いていたが、私は猜疑心が強いので、自分の目で確かめるために佐渡まで出かけた次第。嘘ではなかったもので、一安心。

宮下さんたちの仕事は成功だといえそうだったので、9 月 15 日から京都で開かれる「第二回アジア・太平洋バイオチャー国際集会」で発表してもらった。広若さんと宮下さんのコンビで上手にプレゼンしたので、外国人にも大人気だった。また、今年 10 月 26 日に炭を撒いたという知らせが昨日牧さんから届いた。なお、牧さんは「島の新聞」にナラ枯れや炭の効果について連載記事を書いている。そのおかげで、ほかの地方よりも佐渡では炭や菌根を知る人が増えていることだろう。

一方、宇治の植物園周辺でもコナラやクヌギの様子がおかしくなってきたので、昨年 10 月に出雲土建さんからもらっていた「炭八」を撒いておいた。コナラの根元の落ち葉を剥いで細根を出し、その上に厚さ 3 センチほど炭のかけら（2 センチ以下）を敷き詰めて、また落ち葉で覆っておいた。6 月に掘ってみると、炭の中に根が出て白い菌根が見えたので、大丈夫と思ったが、気になるので 10 月 8 日にキノコ採りをかねて調べに行った。

キノコは一本も出ていなかったが、炭が菌糸で白くなり、コナラの根に細い菌根がたくさんついている。予想はしていても「やった」と大感激である。菌糸と菌根の状態から見てフウセンタケ属やベニタケ属、チチタケ属の菌根のようである。落ち葉の層で繁殖し、

菌根を作る性質を持ったものが増殖して、炭が菌糸の塊になっていた。これでようやく自信を持って、10月10日に福島県奥会津で行われた「森びと」主催の炭撒き作業の前に、コナラの根に対する炭の効用を説明することができた。

もう一つの試験地が京都府山崎の天王山の頂上近くに設けられている。ここはサントリーの蒸留所の裏山で、水源涵養林を維持するために地元のボランティア団体と一緒にサントリーの山田健さんたちのグループが森林の手入れがしているところである。以前にアカマツ林を何とかして残そうと、落ち葉かきや枯れたマツの処分がボランティアの手で行われていることを話したと思うが、最近その近くでコナラやクヌギが枯れ始めた。そこで炭を撒こうということになり、山梨県の白州で作った炭の粉を2010年12月22日にコナラの根元にまいてもらった。落ち葉の層を剥いで根を出して撒き、また落ち葉で覆う方法と、そのまま落ち葉の上から撒く方法を比較してみた。炭の厚さは3センチほどである。

ほぼ11か月後の10月28日に行ってみると、炭を入れた周辺のコナラは元気に生き残っている。そのすぐ横ではカシノナガキクイムシにやられて数本がまとまって枯れていた。さっそく根元を掘って炭の層を出してみると、コナラの若い細根が盛んに出て、白い菌根が見える。多いところでは菌糸が炭をつないでかたまり、その中に菌根を作っていた。数か所掘って見たが、いずれもかなりの頻度で菌根が出ていた。おそらく、炭を撒いた範囲には菌糸と菌根がはびこっていると思われる。落ち葉をかき取らずに炭を撒いたところでも菌根は見られたが、その頻度は低く、菌根形成が遅れるようだった。

これで、条件の異なる三か所で確認できたので、自信をもって皆さんに勧めることができるようになった。初めはコナラ属の樹木につくキノコは酸性の腐植を好むので、炭が効くのかどうか多少不安だった。これも宮下さんや牧さんの勇気ある実験のおかげである。興味のある方はぜひ試してください。ただし、使う炭はよく砕いて粉にすること。

なお、宇治で増えていたフウセンタケ属やベニタケ属、チチタケ属の菌糸は、いずれもセシウムの吸収能が高く、子実体に濃縮されることがチェルノブイリの事故の頃からよく知られている。また、木が茂っている森林は空中を流れる放射性物質を捕捉しやすく、たまる量が多いことも知られている。

そこで、炭を撒くことによって木を元気にするだけでなく、森林にたまった放射性物質を抑えるのにキノコと炭が役立てば、一石二鳥である。というのは、住宅地や農地の放射性物質は洗ったり、表土を削ったりして何とか除染できるが、今のところ山にたまったものをとらえる方法はない。一方、セシウムはいずれ雨水に流されて川に流れ込み、飲料水や田畑の灌漑用水に入って、何年も出続けることになる。

少なくとも水源地域など、危険度の高いところについては、いくら経費がかかっても安全のために可能性のあることをやってみなければならない。炭と菌糸にセシウムを固定できれば、流出をある程度抑えることができ、撒いた炭を回収すれば、除染できるかもしれない。最近アメリカの知り合いから炭と腐植を混合すると、放射性物質が吸収されやすくなるという話が入っている。それを実証するためには、実験しなければならないので、

福島県で今年炭を撒いた試験地で放射能を測定してもらおうことにしている。もう少し原発の事故現場に近いところで実験ができればと思うのだが。

佐渡のナラ枯れと樹木の衰退

話を佐渡へ戻すが、市役所の人案内でナラ枯れを見に出かけた。一言でいえば、かつてのシュバルツバルト同様「恐怖の森」である。谷沿いの斜面が広い範囲にわたって枯れ、白骨累々というありさまだった。昨年の枯れが激しく、標高数百メートルから 800 メートルを超える高いところが全滅している。近づいてみると、わずかに葉を残しているものもあって、カシノナガキクイムシの食痕は少ない。

先に『森とカビ・キノコ』築地書館の中で「衰弱死型」と書いた枯れ方である。衰弱している場所では、もちろん根が腐って菌根もない。根が死んでいるので、萌芽した木もない。福島県の炭撒き試験地でも夏と秋に根を掘り取って調べたが、落ち葉の層にコナラの細根は出ているものの、菌根はほとんどなかった。下の土の層にあっても、その量は極めて少なく、根は裸だった。おそらく、根よりも先にキノコが消えているのだろう。5、7、10月と出かけたが、キノコが採れたためしがない。

なぜ、佐渡のようなきれいなところでこれほど木が衰弱するのだろう。地元の人によると、佐渡は霧のかかる日が多く、冬には雪が積もることもあって、いつも西風が吹いているという。数年前に訪れた隠岐でも、やはり松が枯れてスギや広葉樹が衰弱し始めていた。どちらも汚染源と思えるほどの工場も発電所も道路もない。おそらく、雪や雨、霧が大陸から運んでくる汚染物質が原因のように思える。最近、この二つの島は大気汚染や土壌汚染の象徴的な被害地ではないかと思うようになったほどである。

越境汚染による森林の衰退現象は東アジアに限ったことではない。過去のヨーロッパにおける樹木の大量枯死や北米大陸で広がっている最近の森林衰退現象を見ると、今や汚染が地球規模に拡大したと考えたほうがよい。膨大な量の化石燃料を燃やし続け、今でも止めようとしなないのだから、救いようがない。「放射能で死にたいか、化石燃料の浪費で死にたいか、どちらをとりますか」と、数年前までは講演するたびに冗談半分で話していたが、冗談ではなくなりそうである。

話変わって、その夜は牧さんがお世話になっている自動車整備会社の社長、塚本さんに招かれて、わざわざ秋田沖まで行って釣ってきたという新鮮な魚をごちそうになった。この人は炭焼きが趣味で、山にまく木炭や竹炭を無償で提供してくれる篤志家である。こんないい支援者がいたので、山に炭を撒くという贅沢な実験ができたのである。

あくる朝塚本さんに炭窯や炭を見せてもらい、牧さんに両津の港まで送ってもらったが、その途中で見た風景は衝撃的だった。特に両津港の近くではマツやナラ類はもちろん、スギもケヤキもマダケもサクラもボロボロになっている。山から平地までひどく荒れた感じになり、樹木全体が衰弱している。誇張していると思う方は是非夏の盛りに佐渡へ行って、自分の目で確かめてほしいものである。

一年限りの現象であることを願うが、梢枯れの状態から見て、ここ数年で全国的にひどくなったように思える。今年の夏から秋にかけて、島根、兵庫、京都、福井、石川、山形、福島、岩手、宮城など、各県の山を見て歩いたが、何か変だとしか言いようのない状態になっている。これは私の妄想ではなく、地域に暮らす人々の共通した見方でもある。特に、今年のケヤキの状態は全国的に異常で、不気味なほどである。種子がやたらついただけでなく、9月に入るところから葉が茶色くなり、枝の先端では新芽が伸びた。10月になると、紅葉せず、まるで枯れたようになってしまった。

反対に垣根などに植えられているシイやカシの仲間は10月末になっても新梢を伸ばし続け、我が家のイヌマキの新芽も50センチを超えてまだ伸びている。山は濃い緑で、一向に紅葉する気配がない。ここ20年宇治に住んで同じ木々を見ているが、年々落葉時期が遅くなり、もとへ戻ることはない。

名取市閑上浜の海岸林再生

2011年7月11、12日に福島県金山町にある「森びと」の炭撒き試験地の下見に出かけた。私たちの仕事は根や菌根が炭にどのように反応するかを調べることである。樹木医の栗栖さん、郡山の三瓶さん、茨城の藤沢さん、千葉の大木さんたちに手伝ってもらって、処理木を決めて根の量を測定した。ほかのメンバーは試験地の縄はりと測定で大忙しだった。12日に作業が終了した後、福島県林業研究センターに立ち寄って、この実験のことやキノコとセシウム吸収の話を伝え、夕方一関に向かった。

夜、市役所の高橋一成さんにホテルで会って、海岸林再生計画を説明し、翌朝は一関まで足を運んでくださった鈴木善久会長はじめ、「高田松原を守る会」のメンバーにマツ林再生事業計画を説明した。また、会を代表して前会長の吉田さんなど亡くなった方々へのお悔やみと被災された方々へのお見舞いの言葉を伝えた。この日に「緑の地球ネットワーク」のメンバーでイオンの藤嶋茂さんや岩手県林業センターの成松さんも加わって、秋に種取りを始める相談がまとまった。

このころは、まだ現地の状況が大変だったので、一関で会うことにしてもらったのである。その時「希望の一本松」の写真を見せてもらったが、予想通りすでに葉が茶色に変色し始めていた。若芽が動いているので、何とかしたいという話だったが、到底見込みがないので、口をはさむのを差し控えた。

この後、すぐ宮城県名取市に向かい、「ハマボウフウの会」会長の大橋さんと以前林業試験場でキノコの仕事をしておられた玉田さんに会って、すぐ海岸へ向かった。大橋さんは家を失う不幸に会われたが、いたって元気で災害の跡を案内してくださった。

前年の秋、日経新聞の清水さんと一緒に来たときには家並が連なり、農地やマツ林も見えていたが、今は何もない。大橋さんの家があったところも更地のようになり、がらんだ家のつぶれた車が残っているだけ。お宮のある小高い丘に上がると、見渡す限り荒れ果てた光景が続き、大きながれきの山がそびえているだけである。「……………」といっ

たきり、しばらく声も出ない。それにしてもテレビの画面で見るとよりもよほどひどい。

海岸に出るとサウジアラビアの砂漠並みの猛烈な暑さだった。ついてきてくださった藤嶋さんは今日が人工透析の日だという。大丈夫かと気がかりだったが、小一時間何とか持ちこたえた。藤嶋さんはその後同じメンバーの佐々木陽子さんと中国へ出かけたり、各地でボランティア活動に携わったりといたって元気である。

海岸はすっかり様変わりし、若い30年生ほどのクロマツはすべてなぎ倒されて横倒しになっている。根こそぎ抜けて流れたものは比較的少ない。前に道路や土手が築かれていたところは、それが堤防のようになって波が盛り上がり、落下するときの力で内側を抉り取っていた。そのため、内陸に運河のような溝ができています。ただし、海岸に小山のような砂丘があった内側ではマツ林が残り、建物の影では木が助かっている。また、数百年たった貞山堀沿いのマツの大木は生き残っていた。

ここは三陸海岸と違って大きな津波がゆっくり押し寄せたので、幾分破壊力が弱かったらしい。それでも住宅街も農地もみんな消えて水が溜まり、干潟のようになってしまったのだから恐ろしい。以前に落ち葉かきをしていた場所や休憩場所も流され、教えてもらわなければ、もとの位置がわからないほどになっていた。

若い木や実生の中にも、芽が枯れたものや立ち枯れたものが多いが、その中に緑の鮮やかな高さ1メートルに満たない一叢の若木があった。根元を見ると、キノコが出たしるしの針金がついている。大橋さんによると、宮城県林業研究センターの玉田さんや今埜さんたちがショウロの菌根がついた苗を植えた場所だという。そういわれれば、ショウロがついたときの葉の色だった。ショウロは海岸の最前線に植林された若いマツ林にも出るので、菌に耐塩性があるのだろう。これでショウロの胞子を接種して植える意義が大きくなったといえる。

マツの種取りや育苗の方法について話し、数年先に植える場所が決まりしだい、「白砂青松再生の会」の集まりをやろうということになった。「ハマボウフウの会」では全国から今年の夏すでに人が集まって、閑上浜で集会を開いたそうである。ちなみにハマボウフウは塩にも強く、流されることもなく、青々と育っていた。

10月2日に再度訪れて現場を案内してもらったが、少しずつ工事が進んでおり、がれきの分別も行われていた。ここに、また堤防を作るらしく、その後の話ではハマボウフウの自生地や植栽地、マツが生き残っていた場所なども、かなり削られたという話である。森林管理署に種子採取をさせてほしいと言ったら、抵抗性マツを植えるので、勝手なことをしては困るといわれたとか。植える場所もままならないようである。ボランティア活動で地元の人たちが税金にたよらず自前でやろうとすることになぜケチをつけるのか。

縦割り行政のために、海岸は国土交通省、木のあるところは林野庁、風致地区は環境省や文化庁の指示によって工事が行われる。これに県や市町村が絡み、工事の利権がうごめく図式は災害時も平常時も変わらない。これが政府や行政の実態である。

陸前高田市高田の松原

10月1日に山形で開かれた「緑の地球ネットワーク」の芋煮会に誘われて、伊丹から飛行機で山形空港へ飛んだ。藤嶋茂さんや佐々木陽子さんに出迎えてもらい、伊豆の藤原さんご一家と一緒に会場へ向かった。風が強く震え上がるほど寒かったが、河川敷に大勢集まって鍋を囲んでいる。別にイベントらしいものがあるわけでもない。いわば花見や紅葉狩りの雰囲気である。大同へ行ったことがあるイオンやサントリーの人たちが集まり、顧問の遠田先生も来られてワイワイガヤガヤとにぎやかだった。

長野県千曲市からモキ製作所の人が出てきてストーブを炊き、無煙炭化器で炭を作る実演をやってくださったので、いい話題づくりになった。炭の原料は鈴木さんという農家からもらったサクランボの剪定枝である。最近シロモンバ病が流行りだして困っているという。確かに道路沿いのサクラが何本も枯れていたが、梅の例からみて炭で予防できるかもしれないと話しておいた。この病気は果樹の難病で特効薬はない。炭化が終わるころサツマイモを焼いて、みんなで焼き芋を楽しんだ。

山形から仙台までは車で1時間半ほど、途中油揚げを食べに立ち寄ったが、意外に近いので驚く。夜はKKR仙台に近いラーメン屋さんで、有名な油揚げや牛タンを肴に美味しい酒をいただいた。飛び入り参加された小山重郎さんは農水省に勤務されていた高名な昆虫学者で、遠田さんとは東北大学理学部の同窓生である。30年ぶりだということで、話が尽きないようだった。奥さんの小山晴子さんがマツ枯れに関心があって、私と同じような意見をお持ちだったので、数年前に本をいただき、家内ともどもお知り合いになった次第。遠田さんも小山さんも地震でひどい目に合われたが、至ってお元気で、お互いにたいへん気持ちよく酔わせていただいた。

翌日は晴天。朝早くホテルを出て藤嶋さんや佐々木さんと名取へ行く。駅で大橋さんや玉田さん、津波で家族全員を失った学生さんたちに会って、もう一度海岸を見に行く。7月に比べると、かなり整備されてはいるが、依然として復興の兆しはない。復興計画そのものがまだ決まっていならしい。被災した人たちは家も仕事も失って、どうしているのだろうと気がかりである。

海岸沿いも砂浜が残ったので、防波堤を作って植林を始めるそうだが、急ぐと仕損じるので、住民サイドからの声が届くようにしてほしい。海岸にドングリの木を植えようなどという専門家の机上の空論より、地に足の着いた住民からの提案があつてしかるべきだと思う。種取りの相談をして、仮植えする場所を見に行ったが、途中の水田やハウスの跡はまだ水浸しで、ガマやヨシが生えて湿原に変わりはじめていた。内陸へ入った塩水が抜けないので、かなりの期間広い耕地を放棄することになるだろう。

篤志家が提供してくれたという海に近い仮植えの場所はメロンハウスの跡で、やはりまだ水がたまっていた。大橋さんたちはここでハマボウフウを育て、マツを植えることにしている。先日、小山さんご夫妻が同じ地域にある蒲生海岸の津波前と津波後の比較写真を送ってくださった。それを見ると、津波がマツ林に与えた影響がよくわかる。生き残っ

たのは若木と 100 年を超える老齢木で、戦後に植えた 30-70 年生の若いマツ林は根こそぎ倒れている。これは明らかに根のはり方の差によるものと思われ、間伐や落ち葉のかきとりが大切なことを如実に物語っていた。

大急ぎで相談を終えて、また電車に乗って一関に向かった。ここでレンタカーを借りて藤嶋さんの運転で陸前高田を目指す。途中の道沿いの風景は大地震があったとは思えないほどのどかで、道路も混雑していない。しかし、海岸に近づくと町が完全になくなっている。山沿いのスギは濃い茶色になり、タケも枯れている。ただし、マツは強いらしく生き残っていた。元の町はずれに開店したスーパーによって昼食を買い、車の中で食べながら海岸へ向かった。

何時も泊まっていたキャピタルホテルは残っているが 3、4 階まで津波にのまれたという。その横にある道の駅の跡に立っている、会長の鈴木さんや小山さんなど、以前あった人たちの顔が見えた。「高田松原を守る会」の会員 100 名のうち 10 人がなくなり、家を失った人も多いという。挨拶やお見舞いもそこそこに、さっそく海岸を見に行く。あの「希望の一本松」の周辺に大勢人が集まり、木に登っている人もいる。今日は調査の日で、樹木医や日本緑化センターの人が集まっているという話。何も言うことがないので、遠くから眺めるだけにした。

7 月に予想した通り、一本松はすっかり葉を落として死んでいた。砂にはめ込まれた鉄板の中では泥交じりの砂が黒くなり、黒い水が溜まっている。1.3 メートルも地盤沈下したというのだから、根は完全に塩水に浸かっていたはずである。8 月まで小山さんがポンプで水をくみだしていたそうだが、それでも追いつかなかつたらしい。300 年ほどの老木なので、根を再生させる力は確実に衰えている。

幹をシートや藁で巻いているが、湿って菌の繁殖を誘い、樹皮からの蒸散を抑えるほうが危険である。地表にも藁を敷きつめ、ヒマワリまで植えているが、これは逆効果である。4 月ごろ何人かの人に意見を聞かれたが、何もせずそのまま静かに看取ってやるのが、最良の方法だと答えていた。何とか生かしたいという気持ちはわかるので、手の施しようがないので、余計な口出しは慎んでいた。ここ半年ほどの間に売名や利権目当ての人や企業が押し掛け、いじくり回したようだった。根元には地蔵さんまで建てられていた。

海岸に出ると、あの見事に茂っていたマツ林は影も形もない。それどころか砂浜も消えている。300 年以上たったと思われる大木の幹がねじ切られ、ひっくり返ったものや手をつないで立っているように見える切り株が並んでいる。ここは元来地下水位が高かったので、直根が深くはいらず 3 メートルほどで止まっていた。水に接するところでは細根が出て、菌根もついていたように見える。一方若いマツは直根も浅く、横根も紐のようになって徒長し、弱かったため根こそぎ波にさらわれてしまったという。閑上浜と同じように老齢木ほど根がしっかりしていて波に耐えたが、手入れ不足だった若いマツは簡単に根こそぎ流されてしまったのである。

町があったところは更地のようになり、がれきの山ができていますが、まだ、復興の兆

しがない。地盤沈下したために市の中心部に水が溜まり、満潮時には海水が入るといふ。流されたマツが大量に町の中に打ち上げられていたが、分別して燃料や炭にするという案が出ているそうである。これでは木を植える場所すらないが、植えるのは数年先になるので、気長に基盤造成を待つことにした。

これまでも行くたびに津波の話が出ていたが、これほどひどくなるとは誰も考えていなかったのだろう。ものの数メートルの差で家が流され、人の運命が決まってしまうのだから、自然災害とは恐ろしいものである。

一本松の穂木を接いだ接ぎ木苗や種から出た実生が育っているそうだが、本格的に植えるには、とても数が足りない。そこで、地元の種子を集めるために、みんなで広田湾に突き出している黒崎半島へ行くことになった。途中津波に襲われたところや免れたところを抜けて岬に近づくと祭囃子が聞こえてきた。黒崎神社の祭礼の練習日で、高い梯子の上に獅子舞が登り、お囃子につれて踊っていた。古くから伝わる有名な祭りだとのこと。

しばらく見物して岬の突端へ行くと、よく茂ったマツ林が見えてきた。クロマツだけでなく、アカマツやアイグロマツも交じっている。東北の海岸林にはアカマツが多く、アイグロマツが優勢なところも多いので、その種子も集めてもらうことにした。たくさん松毬がついていたので、11月に入ったら会員の皆さんが採りに来るといふ計画である。

不思議なことに岬の突端は外洋に面しているので、津波の波高が低く、5、6メートルだったらしく、マツ林も岸壁もほとんど傷んでいなかった。コンクリートの船着き場へ降りてみようと思えば歩きはじめたら、道路沿いのコンクリート壁の上に、はえ縄のウキのようなものが乗っている。後を歩いていた佐々木陽子さんが手に取って「アレツ」といふ。上から見ると白い発砲スチロールのウキに見えたが、ひっくり返すと木彫りの大黒様の像である。

きれいな姿だったので、どこかに祭られていたのが、津波に乗って流れ着いたのだろう。7か月もの間人目にも触れず、私たちを待っていてくださったのだろうということになった。その後、佐々木さんに大切にお守りをしてもらって、高田松原に木を植えるときになったら、祠を立ててお祭りしようということにした。その際は佐々木さんたちが「勧進いたしますので、お願いします」といふので、よろしく。

大黒様は出雲の神様、オオクニヌシノミコトである。マツの樹勢を回復する試みも出雲大社での成功例が励ましになって盛んになり、「白砂青松再生の会」が発足した時はこちらでお祓いをしていただいた。昔なら、さしずめ奇瑞といふところだが、なんとなく因縁めいた話が出来上がりそうになってきた。

黒崎神社の前で皆さんにお別れを言って、一関に向かう。夕闇にかすむ陸前高田を過ぎるころから雨になり、次第に激しくなってきた。例によってマツの仕事で出かけると雨が降らないといふジンクスが当たったようである。これも大黒天のおぼしめし。夜暗くなって仙台につき、二人と別れてホテルに泊まる。今度の旅行は藤嶋さんと佐々木さんの力添えで、大成功だった。

翌朝仙台を立って東京で林野庁に立ち寄る。特用林産対策室には、福島県などに対して放射性セシウムを吸収するキノコの採集禁止を勧めてもらったことのお礼に、森林保全・研究課と治山課の担当者には、陸前高田と名取で始める海岸林再生の試験について説明するためである。趣旨は理解してもらえたようなので、いよいよ11月から行動開始である。